

(3)「個と集団をすり合わせた授業づくり」の実際

本校中学部において、課題（ねらい）別に縦割りで学習グループを編成したのは、今年度からである。そのため、自立活動を主とした教育課程を履修する生徒が、その多くを占める本事例の学習グループでは、年度当初、単元や題材の設定、各単元のねらい、具体的な学習内容等をどのようにすべきか、試行錯誤の連続であった。しかし、「感覚と運動の高次化理論」を適用し、年間指導計画における作業学習のねらいを具体化させる中で、各単元のねらいも焦点化し、スパイラル状に高まり・広がりながら各単元がつながる「単元構成」を実現させることができた（表2参照）。

また、対象生徒においては、第Ⅰ期（5月～7月）は、車椅子の牽引機のスイッチ操作だけの学習活動であったのが、第Ⅱ期（8月～10月）には、「絵カードによる目標選択」、「出席確認」の係（役割）を担うなど、活動機会を増すことができた。そして、第Ⅲ期（11月～1月）には、今までとは異なる作業内容への拡大、ペアでの活動によって「友達に意識を向けるための学習機会」を設定するなど、学習活動の幅と質を向上させることができた。

表2 「単元構成」と対象生徒の学習活動の変化

	時数	単元名／単元のねらい	対象生徒に設定した学習活動
第Ⅰ期	15	単元1 「自分の仕事をしよう」 ～やりやすい方法を探り、自分の仕事を決めよう～ *番号は、「生きる力の五要素」に対応 ②提示された物や教師の実演に注目する ③できたことや終わったことの喜びを表情や動きで表現する ④教師からの働きかけに応じて視線を向けたり、手を合わせたりする 教師の支援を受け、一緒に～する ⑤覚醒状態を保ち〇分程、活動に参加する	第Ⅰ期の取組
第Ⅱ期	7	単元2 「時間いっぱい仕事をしよう」 ～「自分でできる」を体感し、意思を伝えよう～ ①自ら～する／取り組もうとする（見る、手を伸ばす等） 「終わり」が分かって～する （教師を見る、手を伸ばす、表情を変えるなど） 次に起こることを予測して～する ②音や光、振動など外界の変化に気が付く 道具や実演を見て何をするのか分かる ③活動に期待感を持つ 称賛されたことが分かり、笑顔を見せる 教師に自分の気持ちを発声や視線、動きで伝える ④相手の動きに合わせて操作する ⑤〇分程度集中して（注目、やり取り、覚醒等）作業する 代替機器を使用し、自分ができる動きを活かし作業を進める 作業に適した姿勢を保持する	第Ⅱ期の取組
第Ⅲ期	8	単元3 「グループで仕事をしよう」 ～前半・後半の2つの仕事で、様々な人との関わりや友達を意識しよう～ ①決められた場所や位置に～する（入れる／行く等） ②「始まり」と「終わり」が分かる 自分が～したことで、〇〇になったことに気付く （因果関係の理解） （以下省略）	第Ⅲ期の取組

6. まとめ(考察)

(1)成果と課題

本研究では、「個の課題を焦点化する視点」と「学校として教えるべき内容を明確化する視点」の双方に「感覚と運動の高次化理論」の適用を試みた。

実際に、授業づくりを進める中で、対象生徒の実態を「発達診断評価法」や「自立活動のチェックリスト」からの「課題関連図」作成など、多面的な視点で捉えたことは、担任だけではなく、学年団教師や学習グループに属する教師全員の生徒理解を促す結果となった。

また、年度当初に、主担当者によって設定された作業学習のねらいを学習グループに属する教師全員で見直したことは、その後の授業改善を加速させる結果となり、大きな意義があった。個々の児童生徒のねらいや活動内容を「生きる力の五要素」に分類し、それらを参照しながら「発達系統表」に照らし、具体化した試みは、授業のねらいを焦点化し、年間指導計画を形骸化させないためにも必要である。

本研究から、「感覚と運動の高次化理論」は、自立活動を主とする教育課程を履修する児童生徒の集団学習の授業改善や「授業や指導の根拠を説明する」上で有効なツールとなり得ると考えられる。

一方で、各教科・領域には、それぞれの教科や領域固有の目標がある。そのため、それらの目標と「感覚と運動の高次化理論」をどのように結び付けるのかという点においては、引き続き検討が必要である。

(2)校内研究との関連から

「カリキュラム・マネジメント」の仕組みを構築するにあたっては、個別の指導計画や年間指導計画など、既存のツールをいかに活用するのか、ということが鍵になる。これまでも、個別の指導計画による「個の課題を焦点化する視点」と年間指導計画から「学校として教えるべき教育内容を明確化する視点」の連動が重要であると認識されていたが、実際には、相互に関連付けた授業設計は、必ずしも十分にできていなかった。今年度の校内研究を通して、学校としての共有すべき授業づくりの考え方が明示化され、年間指導計画を作成する上での要点や年間指導計画の重要性が校内において再認識された。本事例では、校内研究を通して、明らかになった以下の3つの要点に、「感覚と運動の高次化理論」を適用することで、それらを説明する際の「根拠」とすることができた。

要点1：授業の「ねらい」の明確化

要点2：年間指導計画の「単元構成」の工夫

要点3：個（児童生徒）の課題と授業のつながりを説明できること

(3)筑波大学附属桐が丘特別支援学校への研究協力との関連から

本研究では、筑波大学附属桐が丘特別支援学校の「桐が丘L字型構造」に着想を得て、縦軸（系統性の軸）に「発達系統表」、横軸（個別性の軸）に自立活動の6区分からの「課題関連図」を当てはめ、授業づくりを進めた。このように二軸から日々の授業づくりを捉え、「学校として教えるべき教育内容」と「個の課題の焦点化」という視点で教育課程を整備することが重要である。

引用・参考文献

- 1) 古川勝也・一木薫(2016)．自立活動の理念と実践～実態把握から指導目標・内容の設定に至るプロセス～業後の視点から学校教育を考える．ジアース教育新社　注：長崎県立諫早特別支援学校において作成された「自立活動の実態把握チェックリスト」は、上記文献の巻末資料として掲載されています。
 - 2) 宇佐川浩(2007)．障害児の発達臨床Ⅰ 感覚と運動の高次化から見た子ども理解，学苑社
 - 3) 宇佐川浩(2007)．障害児の発達臨床Ⅱ 感覚と運動の高次化による発達臨床，学苑社
- (文責：小倉 靖範)